金属熱処理業

金属熱処理のエキスパート集団

7-20 株式会社 上島熱処理工業所

金属熱処理のエキスパート集団

東京都大田区には、日本のものづくり産業を支える多くの企業が集積していることで有名である。

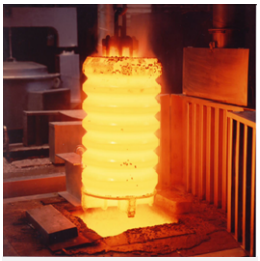
そんな大田区にある株式会社上島熱処理工業所は、金属を熱処理によって硬くさせたり、また靭性（じんせい。金属の粘り強さ）を持たせたりする技術を強みとする企業である。

また、特級技能士 9 人を筆頭に、45 名の従業員のほとんどが金属熱処理技能士という、熱処理のエキスパート集団ということでも知られている。

2009 年には第 3 回ものづくり大賞(優秀賞)を受賞し、同社の半世紀以上にわたって培ってきたソルトバス製法（中性塩を用いた焼入れ炉。形が複雑な金型や、部分的に材質が異なる製品など、均等に冷却することが難しいもの、少量生産品でコストが高いものなど、少量多品種の製品に対応できる製法 ）を用いた熱処理技術は、高い評価を受けている。

一般教養としての技能検定合格

ご自身も特級技能士である上島秀美社長は、技能検定は、従業員にとっての一般教養を身に付けるツールとして位置付けづけられると語る。



金属を高温で熱して金属の性質を顧客の希望の状態に変えていく

技能検定が一般教養と位置付けられる背景には、上島熱処理工業所が扱う金属に特徴がある。上島熱処理工業所で扱っている金属は高級品が多く、技能検定で問われるような、より流通量の多い一般的な金属を扱う機会は多いとは言えない。

しかし、上島社長は、「たとえ日常的に扱うことのない金属についてであっても、知識を修得しておくことは重要です。基本的な知識を持って、この作業をなぜしなければいけないのかを理解した人は、作業の意味を理解していない人より仕事ができるのは確かです。」と自身も特級技能士である上島氏は、技能検定の重要性について説明する。

技能士検定合格のためのサポート

従業員の幅広い知識の習得のために奨励されている技能検定の受検について、上島熱処理工業所では、OJT、Off-JT の両面からサポート体制を構築している。

例えば、OJT の場面では資格保有者と、まだ保有していない従業員をペアにして仕事をさせることで、技能の継承と技能検定合格のための学習の両立を目指している。

また、月に 1～2 回程度、土曜日の時間を用いて、社内で勉強会を開催している。勉強会の講師は、現代の名工としての認定を受けた技能士 2 名をはじめとする社内の技能士や、大手企業の OB(技術者)、経理マン、さらに、社長が学会などに出席した際につながりができた外部人材など、多様な人材が担当している。

技術力の裏付けとしての技能士

上島熱処理工業所では、技能検定をそこで働く従業員育成の 1 つの手段として活用する他、その豊富な技能士の存在を積極的に社外にアピールしている。

そこで働く人材が持つ技術力を、技能検定合格という具体的な形にすることで、技術や知識を可視化するための一種のステータスとして企業の PR につなげることが可能であると、上島社長は技能検定の経営上のメリットを指摘する。技能検定を従業員の人材育成の 1 つの手段としてだけではなく、企業の技術力の高さを示すプロモーション戦略の一環としての形成につなげる手段として考える上島熱処理の取組は、技能検定活用の 1 つの成功例と言えるだろう。

上島社長

株式会社 上島熱処理工業所

- 業種：金属熱処理業
- 住所：東京都大田区仲池上
- 代表者：上島秀美
- 設立：昭和31年
- 従業員：45名
- 技能士32名

技能士へのインタビュー

文珠川 拓実氏 （41 歳） 特級金属熱処理技能士
熊井 雅幸氏 （27 歳） 2 級金属熱処理技能士

金属熱処理のプロ集団にあこがれて

特級金属熱処理技能士である文珠川氏は、上島熱処理で 20 数年働いているベテラン技能士である。

文珠川氏は同社で焼戻し（焼入れによって硬化した組織に粘り強さを与える目的で行われる熱処理の 1 つ）を担当している。

文殊川氏は、高校を卒業後、それまでアルバイトをしていたレストランに就職したが、ある日、読んでいた新聞で上島熱処理について書かれていた記事に目がとまった。金属熱処理の技能士を多く抱える上島熱処理は、文珠川氏には「プロ集団」の趣を持っているように感じ、同社に興味を持ったのが入社のきっかけであった。

入社後はまず始めに焼入れ（金属を加熱した後に急冷することで硬さを高める作業のこと）工程への配属を経て、現在の焼戻し工程に至っている。

特級技能士の語る技能検定のメリット

前述の通り、上島熱処理では技能検定受検を積極的に後押ししている。同社では特殊な金属の熱処理を主に手掛けるため、技能検定で問われるような一般的な金属加工の知識が必要となる機会は多くない。文珠川氏は、「あまり扱わない金属や、その熱処理の方法を学ぶことで、逆に自社の技術の特殊性や競争力について気づくことがあった」と話す。今でこそ前向きに技能検定を捉える文珠川氏だが、始めからそのような意識でいたのだろうか。

「正直、金属熱処理の 2 級は会社が取れと言うから取った側面はありましたが、検定合格によって自分自身の知識が深まっていくことや、実際に行っている業務の科学的な因果関係についての理解につながっていくことを実感し、1 級・特級合格へのモチベーションがあがり、自発的に検定合格を狙おうと思いました。」

技能検定は、熱処理という仕事のこれまでとは違う側面を見せてくれるという効果もあるようだ。また、自分の行っている業務の科学的な理解が深まることで、自分が行っている業務へ興味・関心の度合が増すといった側面もあるのかもしれない。

日本を支える産業で働きたい

上島熱処理では若手の技能士も育っている。今年、金属熱処理 2 級を合格した、熊井さんは 27 歳。会社の中ではまだまだ若手の技能士だ。「焼入れ、焼戻しという工程を経ることで金属の性質が変化していくところが熱処理という仕事の面白さですね。」と語る熊井さんは、文珠川氏の指導を受けながら、焼入れ・焼戻しの工程を担当している。

熊井氏は工業大学でプログラミングなどについて研究していた。上島熱処理は大学 3 年時に参加したインターンシップ先だったことが縁で、大学卒業後同社に就職した。

「最初は上島熱処理に就職するとは思っていなかった。」と話す熊井さんだったが、就職活動中に自己分析をして「日本を支える産業で仕事をしたい。」という自分が持っている考えに気づき、上島熱処理への就職を決めたのだという。

自分の成長を可視化し、確認できるツール

熊井さんは現在 2 級金属熱処理技能士である他、その他の社内資格なども保有している。文珠川氏と同じく、会社の資格取得に積極的な雰囲気が取得の動機の 1 つだが、「会社からの期待もあるし、資格を取得しておくことが、今後のキャリア形成上も重要だと思います。今後どのようなキャリアを歩むとしても、現場の知識を持っておくことはとても大事なことだと思っています。」と若手として今後どのように活躍していくのかも見据えている。近いうちの 1 級の合格を目指している。

熊井さんにとって検定や資格とはどのような意義があるのか、また、どのようなメリットをもたらすのか、という質問に対して、「資格は自動車免許のようなもので、取って当たり前のものだというふうに考えています。また、自分の技術・知識が資格によって見える化されることも取得のメリットだと思います。」という答えが返ってきた。自分の成長を資格という目に見える形にし、確認できるツールとしても資格取得の意味があるのかもしれない。

このように上島熱処理工業所の仕組みは、技能検定が、企業と技能士個人の両面で活用されている好事例であると考えられる。